

『うつほ物語』の記録的文体

— 和歌の列挙及び儀式的場面について —

はじめに

『うつほ物語』の文体の特徴は、たとえば中野「一九八一a」らが「記録的」と表したように、記録的もしくは写実的という言葉で説明されることが多い。儀式の詳細な記述が度々見られるのである。また儀式以外の場面においても、様々な対象についての説明、あるいは叙述、語りが長々となされることがある。「ことごとく書きつくしてしまうのがこの物語の方法なのである」と述べる神田「一九九九」の指摘は示唆的である。

この記録的な文体の中①できわめて特徴的なものとして、列挙や並列表現、また対象を詳細に説明する記述が挙げられよう。このような表現を含むことから、『うつほ物語』の文章は、冗長という批判的な捉え方をされることもある。清水「二九八〇」は、「現実の世界で事実として成立するために必要な条件は、文章の上においても、

新井 隆

物語全体の用不用を問わずに書く」ことについて、「作品の冗長散漫の原因になっているが、これはすべて事実らしくするために必要なことだったのである」と述べる。この清水の評価がこれまでの『うつほ物語』の記録的文体の評価を端的に表しうるもので、「冗長散漫」という非難と、リアリテイの面からの評価の両面が存在する。近年は後者の立場が多く、その早期の例として、たとえば小西「一九七四」や片桐「二〇〇一」がある。片桐は「文章でリアリテイを構築するのではなくて、描かれた事実そのものによってリアリテイが構築されるという書き方」と述べている。肯定的に捉えれば、記録的な文体とは詳細な記述を積み重ねて読者を納得させていく方法とも言えよう。

この方法はそれなりに考えて選び取られたものであると思われる。冗長に思われるような記録的な叙述以外の方法も『うつほ物語』が選択可能であったことを、ほかならぬ『うつほ物語』自体が示しているからである。たとえば、物語の最初の巻である俊蔭巻の前半部

で語られる、兼雅の父の太政大臣の賀茂詣は非常に簡潔な表現でまとめられている。

かくて、八月中の十日ばかりに、時の太政大臣、御願ありて、賀茂に詣で給ひけるを、舞人・陪従、例の作法なれば、いと厳しうて、この俊蔭の家の前より詣で給ふ。舞人・陪従厳しう、御前数知らず過ぎ給ふを見ると、毀れたる部のもとに立ち寄りて見るに、遊び人・御車など過ぎて、立ち遅れて、これも前驅追ひて、歳二十ばかりの男、また十五歳ばかりにて、玉光り輝くうなるの、御馬副多くて渡り給ふ。
(俊蔭 二四)

「例の作法」ということでまとめられ、他の儀式的な記述に見られるような、人数や服装への具体的な言及は見られない。ただ「厳しう」という言葉でまとめているだけである。そして、それを見る俊蔭女の側からも「厳しう」「御前知らず」という漠然とした捉え方がなされている。このような表現ができるのにもかわらず、『うつほ物語』はしばしば儀式などを詳細に叙述したり様々なものを列挙したりするのであり、記録的な文章をある程度意識的に作っているとも言える。もちろん「例の」でまとめられるものと、通例を超えた規模のものとの間に懸隔はあるうが、そうであれば規模を超えたものについて詳細に叙述することは、その盛大さを印象づける効果を有することになる。やはり長く語ることに意味があるということになる。

また、『うつほ物語』においては人数や物の数について数詞を使

用して明確にする傾向がある。さらに、動作主や動作の受け手についで逐一人物名を挙げて言及することも多い。しかし、次のような簡潔な表現にまとめられることもある。

女御の君、「まかで給はむ」と聞こえ給ひつれば、御迎への車二十ばかり、四位・五位・六位数多く、はらからの君たち、さながら参り給へり。御輦車の官旨遅く下りて、夜更けてまかで給へり。
(菊の宴 三〇四)

正頼の長女の仁寿殿の女御が里に下がる際、四位・五位・六位の人数を「数多く」と、また供として参上する人物を「はらからの君たち、さながら」と、それぞれまとめている。『うつほ物語』にはこのように簡潔にまとめた表現も存在する一方で冗長との評価を受ける詳細な叙述や列挙表現も存在するのであるから、記録的な文体は何らかの意図の上に選り取られたものであろう。

記録的な文体は、他の物語と『うつほ物語』とを差別化する表現手法の一つに位置付けられる。それが成功しているか否かは読者の感覚に委ねられる面はあるが、記録的という言葉で従来片付けられてきた『うつほ物語』の手法については、改めて丁寧に見ていく必要がある。選り取られた叙述の方法には、物語において重要な意味、もしくは場面の特徴を強く象徴して魅力を高めるといった効果が見られると考えるからである。本稿では、このような考えにもとづき、特に和歌の列挙及び儀式的場面を例に、語りのありかたに注意しながら検討してゆく。

一 春日詣巻における二つの記述について

和歌の列挙が度々見られる『うつほ物語』の中で最長となる三八首の列挙が春日詣巻に見られる。正頼一行が春日社に願掛けに訪れた場面で、正頼の依頼を受けた仲頼が和歌の題となる文章を書き、その文章の言葉に沿って三十八人の人物がそれぞれ和歌を詠んでいく。長くなるので冒頭の四人と最後の一人だけを引用する。

式部卿の親王に奉る。御覧じて、「寝待ちの月」を、

昨日こそ寝待ちもせしか春の夜の今宵の月をいかが見ら

む

と書きて、中務の親王に奉り給ふ。中務の親王、「花を誘ふ」、

わが宿に移してしかな野辺に出でて見れども飽かぬ花の匂

ひを

兵部卿の親王、「鶯を迎ふ」、

里に咲く花に移らで奥山に待つに遅るな鶯の声

左のおとど、「雁の列」、

故郷に友も残さず来し雁はここにて春を過ぐさざらめや

(中略)

同じき尉平惟輔、「遅れたる月」、

朝影に遙かに見れば山の端に残れる月もうれしかりけり

など、これかれのたまひて、興ある夕暮れに、女方の御前に、

君たち、物の音掻き合はせて遊ばす中に、あて宮、か的一条殿のを買はれたる、都風といふ琴を、胡笳の声に調べて、こくのめてたといふ手、折り返し遊ばす。

(春日詣 一三九〜一四四)

三人目の兵部卿の親王以下は、途中で和歌の題が書かれた紙が回される描写が一度入ることを除き、人物名、仲頼の文章の言葉からとった歌題、歌、が淡々と並べられていく。歌の配列は身分順、また詠者名は、高貴な人物は官職名、少し身分が劣る者は官職名と姓と名、さらにそれより劣ると姓の省略が起こることがある、といった法則性は他の場面と共通している。この箇所については、記録性に基づく長大さとそれぞれの歌以外には、取り立てて表現の特徴は見当たらないようである。中野「一九九九」の新編日本古典文学全集のこの場面の注にも、

この物語の、最も特徴的な一段。三十八首の題詠を、評言なしで、ひたすら記録する。この執拗なまでの記録性に対しては、文体としての情趣の乏しさ、内容的なわずらわしさといった負の評価もあるだろうが、虚構世界の現実感、情報量に比例することも確かである。圧倒的な情報の量は、おのずから響き合っている、個々の行事や儀式に動かしがたい現実感を与えていく。執筆に費されたエネルギーを考えると、物語的效果を狙った叙法というよりも、作者の内に、描写せずにはいられない衝動があったのだろう。

とある。物語のために三十八首の歌を作る労力は非常に大きく、その膨大な情報量の結果、現実感が高まるという点はその通りであろう。ただし、この長大な和歌の列挙をなさしめているものについて、エネルギーや衝動だけで説明できるであろうか。この点について慎重に検討する必要があるように思われるのである。

吹上上巻では、場所を変えて集団で歌を詠む場面が連続する。それぞれがそれなりに長い時間をかけた遊びであったことは、各場面の最後の言葉から分かる。

林の院：「など言ひて、夜一夜遊び明かす。」(吹上上 二五七)

渚の院：「などで、夜一夜遊び明かす。」(吹上上 二五九)

藤井の宮：「などで遊び暮らす。」(吹上上 二六一)

鷹狩り：「などで、皆帰りぬ。」(吹上上 二六八)

帰京の前：「遊び明かす。」(吹上上 二六九)

紀伊国に訪れているのであり、それぞれの場面の参加者はそれほど大きく異ならない。しかし、林の院、藤井の宮、帰京の前においては和歌を詠んだ都からの客人の七人が同じである一方で、渚の院と鷹狩りは松方らの歌への言及がない。もちろん仲忠一行内には身分差があるため、場面によって松方らが近くにいたかどうかという問題もある。ただし、渚の院では一晚を遊び明かしたのであるから、渚の院の夜に侍従、少将、行正だけが歌を詠んだとは考えにくい。ここには語られなかった和歌が想定されるのであり、そうであれば春日詣巻の和歌の列挙も何らかの方法で多少の省略が可能であっ

たと考えられる。

春日詣においても一部の和歌を語らないことは可能であったはずなのである。それにもかかわらず長大な列挙を行ったのはなぜだろうか。この問題について大きく二つの点から考えていく。

まず、春日詣巻冒頭の春日社参詣は、巻の冒頭に次のように語られていた。

御供に仕うまつるべきうなる・下仕への装束調せさせ、乗尻の雑色より始め、陪従・舞人らの装束、臨時祭の様なり。よろづのことを整へ、人のかたちなどを選らせ給ふこと限りなし。童

陪従四十人を整へ、男陪従四十人・舞人八十人、走り馬十匹。

舞人は、殿ばらの君達・殿上人・わが御君達より始めて、世の中に名高き逸物の者どもをなむ。童陪従にも、殿上の童をなむしたりける。かくて、女は、大人四十人・うなる二十人・下仕

へ二十人。装束は、大人は青色の唐衣、童は赤色に縹の上の袴、

下仕へは青丹に柳襲着たり。大人・下仕へ、二十歳の内、童、十五歳の内、童・下仕へ、丈等しく、姿等しく選びたり。

かくて、二月二十日になむ詣で給ひける。御車、糸毛十・檳

榔毛十なり。糸毛十には、宮より始め奉りて、女御子たち、あ

またの北の方、あなたこなた、合はせて九所。女御の君は、孕

み給へれば、とまり給ふ。御装束、赤色の唐の御衣に羅の摺り

裳、萌黄の色の織物の御小袿設けたり。檳榔毛十には、一つに、

四人づつ乗りて、うなるは、鬢頬結びて、馬に乘れり。下仕へ

は、徒歩より歩む。樋洗まし六人、青丹の上の衣着て歩み、御車の御前駆、四位十八人・五位三十人・六位五十人。馬の毛・下襲の色整へたり。世の中にありとある上達部・親王たちより始め奉りて、山賤・民まで、今日の御供に仕うまつらぬなし。大宮の大路より下り給ふ。(春日詣 一三七―一三八)

『うつほ物語』においては、参詣などの際の儀式にもなつてこのような細部までこだわった叙述が複数見られる。そのうちの一つである。後述するが、このような細かな描写はそれぞれ多少の違いがあり、丁寧を読むことが求められる。この春日詣については、波線部のように参加者の人数やどのような人が参加しているかという点にこだわった叙述になっている。童陪従、男陪従、舞人の人数に始まり、女房、うない、下仕えの女性の人数が示される。そしてさらに春日詣に参加する女性、前駆と続き、最後に「世の中にありとある上達部・親王たちより始め奉りて、山賤・民まで、今日の御供に仕うまつらぬなし」と、男性貴族から身分の低い者まであらゆる人が参加していることを述べる。その中で、二重傍線部のようにあえて参加していない人が誰であるかを述べるというところは、参加するべき人々はみな参加していることを強調することと連動しているだろう。また、それぞれの人数も事細かに記されている。一方で装束については多少の記述はあるものの他の場面に比して少なく、特に陪従や舞人については「臨時祭の様なり」という言葉で簡潔に語るのみである。

つまり、この春日詣においては、ありとあらゆる大勢の人が参加したということが重要なのであり、物語もこの設定を生かしながら場面が構成されていくのである。

具体的には、神楽が中心の場であるにもかかわらず、春日社に到着した後の神楽の叙述は簡素である。しかし、その神楽そのものではないものがこの場面的特徴的な風景として丁寧に語られていく。

かくて、御社に詣で着き給ひて、色々の幄打ち渡して、御車下り給ふ。男君達、着き並み給ひぬ。辰の時ばかりより楽始まりて、申の時ばかりに果てぬ。舞人に、女の装束一装、つつ賜ふ。

陪従には、桜色の綾の細長一襲・袴の袴一具、つつ賜ふ。垣下におはしたる人々に、綾襲の女の装束一具、つつ、五位より下は、白き打ち袴をなむ賜ひける。残る数なく被きわたるを見れば、花を吹き散らしたるやうになむ見えける。(春日詣 一三八)

傍線部は、参加者の多さに関連する表現である。様々な色の幄が張られているが、参加者の数を考えれば、その数も多かったと考えられる。その風景が「色々の幄打ち渡して」という言葉で表現されている。色も多様で、色鮮やかな美しい風景であったことが想像される。また、男君が居並ぶ様が「着き並み」と言及される。最も特徴的な箇所は「被きわたる」であり、大勢の人がすべて褒美の衣を賜った後それを肩にかけているのであるが、花を吹き散らしたようであるという比喩表現により、華やかで美しい様子であることが表されている。この比喩は多くの人が参加しているからこそ成立する

ものであり、設定を生かしながら優美な風景が構築されているのである。この場面では、身分がそれほど高くなく大勢の人々としてまとめられるような垣下に控える人々の人数の多さを活かして語られていた。

ただし、高貴な身分の人々もあらゆる人が参加していることが春日詣巻冒頭の記録的な叙述の中で強調されていたことも忘れてはならない。春日詣の場面の和歌の列挙は、この参加者について注目する叙述を引き受け、対応するものだと考えられる。中野「一九八一b」も「世の中にありとある上達部・親王たちより始め奉りて、山賤・民まで、今日の御供に仕うまつらぬなし」の箇所と和歌の列挙の照応関係について言及しているが、他の表現についても広く照応が見られ、問題の所在を大きく捉える必要があったのである。春日社の場面に先立つ記録的な叙述で詳細に言及されていたものが、その後の場面のあり方、もしくは場の捉え方、そして語り方に影響を及ぼしていくのであり、あらゆる貴族が参加したということ強調して述べた以上、大勢の貴族の和歌が列挙されていくのである。

二 列挙表現を誘うもの―場の状況・

書かれることの記録性・物による媒介―

春日詣の和歌の列挙について、もう一点重要なことがあると思われる。それは、書かれた和歌であるということである。この場面は、

まず和歌の題となる文章を仲頼が書く。

仲頼、「仕うまつりにくきこと、必ず」と言ひて、書き出だす、「あはれ、今日は春の半ばの月、……。〔中略〕遅れたる月」と書き出だして、式部卿の親王に奉る。御覧じて、「寝待ちの月」を、

昨日こそ寝待ちもせしか春の夜の今宵の月をいかが見ら

む

と書きて、中務の親王に奉り給ふ。〔春日詣 一三〇〕

次に、二重傍線部のように、その題が書いてある紙に式部卿の親王が和歌を書いたことが示される。この紙が回っていき、最後の一人の後は「など、これかれのたまひて」であり、書いたとは明示しないものの、最初の式部卿の親王だけが和歌を書き付けたとは考えにくく、おそらくこの和歌の列挙はすべて書かれたものであったのである。書かれたものに対する記録と、口承による記録との相違を検討する必要があるだろう。また、句題が存在するようなや形式の整った場と、それ以外の場との相違も考えられるのである。

これらの相違は、先に言及した吹上上巻に顕著であると思われる。紀伊国滞在中、和歌の列挙が時間の進行とともに見られる。その最初が、三月三日の節句の日である。「あるじの君・客人三所の御前に、白銀の折敷・金の台据ゑて」（吹上上 二五〇）に続き、種松が用意した節句の豪華な御膳が語られた後、次のように続く。

人々の御前の折敷どもを見給ひて、仲忠の侍従、花園の胡蝶に

書きて、

花園に朝夕分かず居る蝶を松の林はねたく見ららむ

少将、林の鶯に書きつく。

常磐なる林に移る鶯をとぐらの花もつらく聞くらむ

あるじの君、水の下に魚に、

底清く流るる水に住む魚の溜れる沼をいかが見るらむ

良佐、山の鳥どもに、

葦繁る島より巢立つ鳥どもの花の林に遊ぶ春かな

(吹上上 二五二)

『うつほ物語』の「書きつく」の語義については田中「一九九二」が、また物に書きつけるといことが『うつほ物語』において重要な意味を持つことについては杉野「二〇〇〇」、武藤「二〇一七」が既に論じている。『うつほ物語』においては、物に書きつけるとい行為が物語中で少なからず見られるが、それは人々の関係を結ぶ行為であり、物語を展開させる一つの要素となっている。ひとまずこの場面では、「あるじの君・客人三所の御前に」と対応し、その全員が漏れなく和歌を書きつけ、それらの歌が語られていることをおさえておきたい。

また、藤井の宮の藤の花の賀では、題が与えられて人々が和歌を詠んでいく。すべての人の和歌を引用すると長くなるため、省略した箇所では和歌を詠んだ人物の名を最後の【】内に記す（以下、同様の引用本文では同じような処置をとる）。

君たち、大和歌遊ばす。「藤の花を折りて、松の千歳を知る」といふ題を、国の守のぬし、

藤の花挿頭せる春を数へてぞ松の齢も知るべかりける

【あるじの君・侍従・少将・良佐・国の権の守・右近将監松方・

右近将監近正・右近将監時薩・国の介・まつりごと人種松】

(吹上上 二六〇～二六一)

この場面に限らず、題が与えられている場合、大勢の人が詠む傾向がある。それは、紀伊国から帰京する際も同様で、

水の上に、花散りて浮きたる州浜に、「春を惜しむ」といふ題

を書きて奉り給ふ。

(吹上上 二六八)

で始まる和歌の列挙も、都からの人々の詠者は藤井の宮の場面と同じ人物たちであった。しかし、林の院と巳の日の祓はこれらとは様相が異なっていく。

林の院において歌が続く場面は次の通りである。

花は、色を尽くし、ただ今盛りなり、風に競ひて散り交ひ、漕

ぎ渡る小船近く帰る、花一つに続きて見ゆれば、少将、

行く船の花にまがふは春風の吹き上げの浜を漕げばなりけ

り

あるじの君、

春風の漕ぎ出づる船に散り積めば籬の花をよそに見るかな

侍従、

行く船に花の残らず降り敷けば我も手ごとにつまむとぞ思

ふ

良佐、

風吹けばとまらぬ船を見しほどに花も残らずなりにけるか

な

などのたまふほどに、宮より、種松が妻君、合はせ薫物を山の形に作りて、黄金の枝に白銀の桜咲かせて立て並べ、花に蝶どもあまた据ゑて、その一つにかく書きつく。

桜花春は来れども雨露に知られぬ枝と見るぞ悲しき

とて、よき童して、林の院に奉れり。君たち、見給ひて、蝶ごに書きつけ給ふ。侍従、

雨露に梢は分かず懸かればや花の枝とは人の知るらむ

【少将・あるじの君・良佐・松方・近正・時蔭・種松】

(吹上上 二五五―二五七)

この場面は二つの箇所整理できる。まず、風景を見ながらあるじの君と正式な客人の三人が歌を詠む箇所である。おそらく即興で声に出して詠んでいる歌であろう。ここでは四人しか詠んでいないか、他の人物については「など」で省略されていると考えられる。少なくとも言及されていない。他の場面で歌に言及がある人たちの歌に言及されていないということが重要である。しかし、直後の、作り物の「あまた」の蝶に歌を書きつける際は、松方以下の人物も歌を詠み、かつそれらが物語本文として記されている。連続した一つの場面ではあるが、歌を詠む人物、あるいは歌について言及される人

物が異なっているのである。

巳の日の祓も見ておくと、歌が並ぶ箇所が二つあり、それぞれを引用する。

・夕暮れに、大きな釣舟に、海女の、桹縄を、一船繰り置きて

漕ぎ渡るを、少将見て、「これ、かく見ゆとも、仲頼が心ざし

よりは短からむかし」など言ふを、あるじの君、うち笑ひて、

くる人の心の内は知らねども頼まるるかな海女の桹縄

【侍従・少将】 (吹上上 二五八)

・渚より、都鳥連ねて立つ折に、浜千鳥の、声々鳴くを聞きて、あるじの君、

都鳥友を連ねて帰りなば千鳥は浜に鳴く鳴くや経む

【侍従・少将・行正】 (吹上上 二五八―二五九)

この日は、水辺の風景の中で二回、それぞれ三人と四人が歌を詠んでいる。林の院の前半の箇所と同じく、情趣のある風景や鳥の鳴き声に心が動いて自然と歌が詠まれている。その場で声に出して詠んでいる歌で、おそらく書かれる類のものではなかっただろう。この日に歌を詠んだ人物はあるじの君の他は仲忠、仲頼、行正に限られ、正式な客人の三人である。このような状況では、身分の高い者と低い者との間に多少の距離があることも一因ではあるが、歌の詠者は限定的になる傾向がある。また、仮に詠まれていたとしても省略されているとも言える。重要なのは、このような口頭で詠まれた歌が物語の中に示されるときには、周辺の人々が詠んだ歌への言及が

ないということである。どのような場であるか、という点がどのような身分の人の歌まで言及するかということにかかわっていることがまず理解できる。

また、紙などの物を媒介にしていることも列挙の拡大に繋がっているだろう。春日詣の際の歌の列挙においても身分が大きく隔たるところで物の移動が語られている。

宰相直正、「花風遅し」、

佐保姫やもの憂かるらむ春の野に花の笠縫ふ枝の見えねば
とて、向かひたる人の、四位より始めての人に賜ふ。

(春日詣 一四一)

公卿とそれ以外の人々には懸隔があるが、仲頼の歌題が書かれた紙が渡ることによって、四位以下の人々も歌を詠むことになり、引き続き歌が列挙されていく。紙や工芸物などの物質が回ることにより、隔てのある身分の人々にも視点が移り、歌の列挙が続いていく。この方法は国譲下巻の二十三首の歌の列挙でも同じように見られる。

式部卿の宮、

積もり行く花も嘆くに木隠れて空に知られぬ下枝なりけり
など申し給へば、この宮、「数回仕うまつりそしたりや」とて、
御かはらけ参り給ふ。かはらけ下りて、……

(国譲下 八二〇)

嵯峨の院の花の宴で、式部卿の宮の直前には、嵯峨の院、今上帝、朱雀院が歌を詠んでいる。この場面では盃が身分順に下っていきな

がら歌を詠むことが示される。さらに、『うつほ物語』の歌の列挙の箇所では通常は身分順に歌が詠まれ、低い身分の者の歌で終わることが多いが、この場面では朱雀院、今上帝、嵯峨の院に戻ってくる。

新中納言、

君群れて花見る今日と思はずは山の朽木も春を知らめや
とあるを、朱雀院、いといたく誦ぜさせ給ひて、かはらけ参ら
せ給ひてのたまふ、

わが前に木高くなりし本桜山辺に枝ぞ朽つと嘆きし

内裏の御、

朽ちぬとて嘆きし枝は春を知るありし桜の見えぬ今日かな
嵯峨の院、

もろともに生ひし桜のまづ枯れて残れる枝を見るが悲しき
ななどで、御かはらけ、度々になりぬ。(国譲下 八二二)

儀式や宴の場面の和歌の列挙において中納言の次に朱雀院が歌を詠むというの『うつほ物語』では異例とも言えようが、それを物語の中で説得力を持って語らしめているものは、「かはらけ」という物体の媒介があるからではあるまいか。朱雀院が新中納言の実忠に盃を渡したのであり、新中納言から朱雀院に渡したのではないが、かはらけという物が両者を繋ぐのである。物質という媒介があるがゆえに、身分の隔てを超えて歌が詠まれていると整理できるのである。もちろん、この場面では、小野に籠っていた実忠が中納言に任

ぜられて都に出てきたことを朱雀院が感慨深く思つて歌を詠むのであり、実忠の後に朱雀院が歌を詠む理由もあるのではあるが、歌を詠む際に盃に言及されることが注目されるのである。物の移動を介した強い繋がりが印象づけられると言えよう。

『うつほ物語』では、公卿であるか否かなどの身分に対する意識が強く見られる。よつて、各場面で言及される人物の範囲については身分を一つの基準にしているようである。たとえば、蔵開上巻では十二首の歌が列挙された後、草子地により省筆が起こっているが、公卿としては低い身分の権中納言の歌まで言及した後に生じていた。

権中納言、

緑子の多かる中に二葉よりよろづ世見ゆる宿の姫松

これより下にあれど、書かず。

(蔵開上 四八七)

この蔵開上巻も盃が回る場面であったが、そのことへの言及は冒頭にとどまり、春日詣の場面や国譲下巻で見られた、歌の列挙の途中で物に言及されるということは見られなかった。やはり春日詣の場面の歌の場の長大化には物質性への言及が無関係ではないだろう。

神田「一九九九」は、『うつほ物語』の言葉について「紙面の上

に現実と同じものをもう一つまるごとつくりうとしており、それゆえの記録なのである」と述べるが、紙が回ってそこに書きつけていくというあり方は、紙で作られた書物を持ってその和歌を眺める読者の眼前に、作中世界で紙や物に書かれた和歌を表出させるとも言えよう。それを媒介するものが、作中世界における物質性、特

に紙への言及である。この点に関連する例として、菊の宴巻の屏風歌が、実際の屏風歌の書き方を模倣しながら書かれていることが注目されよう。節を改めてもう少しだけ説明をしていきたい。

三 書きつける言葉の強度

嵯峨の院の後である大后の宮の六十の御賀において屏風歌が詠まれる場面は、他の箇所と本文のありようが異質なようである。

御屏風の歌、

正月。子の日したる所に、岩に、松生ひたり。てうに、鶴遊べり。

右大将

岩の上に鶴の落とせる松の実は生ひにけらしな今日に会ふとて

二月。人の家に、花園あり。今、植木す。民部卿

植木並むる人ぞ知るべき花の色はいく代見るにか匂ひ飽くとは

(中略)

十二月。仏名したる所。中将仲忠

かけて祈る仏の数し多かれば年に光や千代もさすらむ

など詠みて、少将仲頼書けり。(菊の宴 三一五―三一六)

すべての写本ではないが、この箇所は、尊経閣蔵前田家十三行本や京都大学附属図書館蔵近衛家旧蔵本のように、詞書よりも和歌の本文が上がる形で書かれている写本も残っている。⁽²⁾『うつほ物語』が成立した当初にどのような形式で記されることが多かったのか定

かではないが、「御屏風の歌」から後の本文は屏風歌そのものにあたるので、物語の内容ではあっても屏風歌の形式がそのまま活かされて記された可能性も考えられよう。少なくとも、屏風歌の形式で記されることに繋がるような本文のありようなのである。³⁾正月から十二月までそれぞれ一首ずつ詠まれた屏風歌が列挙され、二重傍線部のように屏風に仲頼が記したことが最後に明示される。特にこの屏風歌の羅列の箇所本文は、月や人物名を含めて屏風歌の体裁で仲頼が書いたものと重なっていくのであり、注目される。何かに書かれた言葉の強度の高さを窺わせるのである。

これと同じことは、内侍のかみ巻で俊蔭女が尚侍に任じられる場面でも言える。それは、俊蔭女を尚侍に任じることを日給の簡に朱雀帝が書き記し、そこに上達部たちが署名と歌を書きつけていく場面である。その場にいる人々が書いたものが丁寧に語られていく。

御前なる日給の簡に、尚侍になすよし書かせ給ひて、それが上に、かくなむ。

「目の前の枝より出づる風の音は離れにし物も思ほゆるかな
これがあはれなればなむ」と書きつけさせ給ひて、上達部たちの御中に、「人々、これに名して下されよ」とて賜びつ。左のおとど、見給ひて、「いとおぼつかなし。誰ならむ」と思せど、御手づからのことなれば、名し給ふ。「左大臣従二位源朝臣季明」と書きつけて、その傍らに、

「風の音は誰もあはれに聞こゆれどいづれの枝と知らずもあ

るかな

おぼつかなき宣旨になむ」と書きつけて、右のおとどに奉り給へり。
(内侍のかみ 四三〇～四三一)

波線部のように、尚侍任命にふさわしく、季明が書いた官職、官位を付けた正式な署名を、「と書きつけて」と言及している。書かれた言葉がそのまま残される語りのありようがこの箇所にも見られるのである。そして季明に続いてその場にいた上達部全員に日給の簡が回っていき、おのおのが季明同様に官職、官位、氏と名を書いたことが「右大臣従二位藤原朝臣忠雅」、「大納言正三位兼行左近衛大将陸奥出羽按察使源朝臣正頼」など省略されない正式な署名の形で繰り返される。

『うつほ物語』では列挙表現が多く見られるが、従来はそれらを列挙表現という言葉で等閑視してきたと言えよう。しかし、たとえば同じ和歌の列挙であっても、書かれた歌か口承の歌かで記録の強度が異なるように、完全には同一視できないのであり、それぞれの列挙表現を言葉に沿って注意深く読む必要があるのである。

和歌が何かに書きつけられるということへの言及が列挙を支える力になっていくことをとりあげて検討したが、列挙や記録的文体という言葉でまとめて捉えるだけではなく、なぜその列挙が生じるのかなどといった視点からも捉えていくことが『うつほ物語』の表現を考えていくうえで重要なのである。

四 儀式の場面における詳細な記述

「はじめに」で引用したとおり、俊蔭巻の賀茂詣の場面は通常の賀茂参詣と同様の人数や衣装であったということもあり、簡潔な表現でまとめられている。一方で第一節で論じたとおり、正頼らの春日詣においては参加者、参加人数が通常と異なり、そのことについて細かな叙述がなされるとともに、後の場面でもそのことを踏まえた表現が見られた。萩野「二〇一三」は、記録的な文体の研究史をまとめたうえで、「物語の中で行われる公私の行事などは、それは物語の文章であるとは到底思えないほどに、話の筋とは無関係な部分が肥大化する場合がある」と述べる。しかし、そうとは言い切れないように思われる。また、大井田「二〇〇二」らが、『うつほ物語』の饗宴が物語の中でどのような意味を有するかという面を既に考察しているが、儀式や行事の場について、叙述の表現そのもの、とりわけ詳細に叙述するありようにはまだ論じる余地があると思われるのである。

儀式的な場面での詳細な叙述は、物語の中で最も目立つものの一つであり、『うつほ物語』の特徴として挙げられることも多く、表現を考えていく際には避けて通ることができないであろう。儀式的場面について、ひとまず複数の箇所を取り上げながら検討し、表現における特徴を考察していく。

まず俊蔭巻には、相撲の還饗の場面もあり、その場面は次のように語られる。

例は、舍人・相撲人などには、信濃の布を賜ひけれど、今年は、心殊に、陸奥国の絹を賜はず。蘇枋の脚つけたる中取り三つに、東絹積みて、御前に昇き立てて、政所の人、装束して出で来て、召し立てつつ賜ふ。番長・相撲の最手には四疋、ただの舍人・相撲には二疋賜はず。また、この中將・少將の御隨身には一疋づつ賜はず。

被け物、垣下の親王たちに、赤朽葉に花文綾の小桂・菊の摺り裳・綾搔練一襲・袷の袴、宰相より始めて中將までは、綾の摺り裳・黄朽葉の唐衣一襲・袷の袴、少將より始め垣下の次官たちには、薄色の裳・黄朽葉の唐衣一襲・袴、色劣れり、大夫たち・府の将監までは、白き綾の一重襲・袷の袴、人々の御供なる、官ある人には、白張の袴一具、府生には、白き一重襲賜ふ。今日参りたる人、禄賜はらぬ者、かつなし。

(俊蔭 五九)

俊蔭巻の賀茂詣と同様に、「例」が意識されている。しかし、賀茂詣の場合と異なり、この相撲の還饗は、通常と違うということを示すために「例」が使われている。通例以上のことをし、豪華さや財力、もしくは権威といったものが示されていくのである。この場面では禄の豪華さが示されているが、実はこれに先立って、正頼が禄について命令をしている箇所がある。

年返りて、八月に、この殿に相撲の還饗あるべければ、おとど、北の方に聞こえ給ふ、「饗のことすべきに、はや、被け物のことせさせ給へ。この度のこと、ここにて初めてすることなるを、

心殊に、設けの物など勞りてし給へ。例は、中将より始めて、

府の人、皆祿は取らするを、今年は、『そこにもものし給ふ』と、聞く人も、心憎く思はむものぞ、四府のぬしたちも設け給へ。

例は、中将には、女の装束一領づつ、少将には、白き桂一襲・袴をなむものするを、この度は、中将に、なほ、細長を添へて、少将には、綾の桂・三重襲の袴などを設け給へ」

(俊蔭 五六―五七)

「例」という言葉を基準にしてそれ以上のことをしようとしていることが前もって示されていたのである。この箇所の子頼の指示と実際に与えられた祿は多少異なっているが、全体的には豪華な祿になつていと言えよう。具体的には、二つの引用箇所の波線部の表現を踏まえれば、通例であれば少将に与えられていた「白き桂一襲・袴」が、今回の還饗では垣下の次官より身分の低い「大夫たち・府の将監まで」に「白き綾の一重襲・袴の袴」が与えられており、この表現の重なりから通例以上の祿であったことが明確に示される。以上を踏まえると次のように整理できよう。まず、儀式や行事に際して何らかのこだわりや考えが作中人物にあり、それに沿った準備がなされ、語り手によって実際の儀式の場が語られる際には、作中人物がこだわったと思われる、その場の特徴となることが語られ

ていくのである。結果的に、作中人物の意図と語り手が重点を置いて語るものが重なるのである。そして、それは読者の興味とも重なることも付言しておきたい。

五 儀式的場面における語り

第四節で論じた儀式的場面における、登場人物の趣向とその後の語りの重なりについて、もう少し例を挙げて見ていく。伊藤「二〇一一」は、地の文と直後の和歌の言葉の重なりから語りのありようを分析したが、『うつほ物語』の語りを考える場合、やはり表現の繰り返しや重なりは大きな手がかりになるだろう。

儀式や行事において列挙や詳細な叙述などが見られる場面の一つに、嵯峨の院巻の神楽がある。この場面においては、才の男たちが注目されていた。

かくて、十一月になりて、御神樂し給ふべき設けし給ふ。おとど、左大弁の君に、「こたみの神樂は、しはすへきたひなるを、『少しよろしくせむ』となむ思ふ」。弁の君、「かかることは、『始むる時は、いと厳しくはせて、後々まさる』などなむ申すこと侍る」。おとど、「なほ、これかれ、上達部いまし合ひて見給ふに、いと物映えなくては、ものしからむ。才ども、声よろしからむなど選びて、ものせられよ」とのたまふ。

(嵯峨の院 一七八)

このように正頼の命令が語られ具体的な準備に入っていく。その相談の中では、「ただ今、内裏の御神楽の召人は」で始まる十六人の名の列挙があり、「すべて三十人の者どもこそは、ただ今の逸物には侍るなれ」と強調され、「才ども」の禄が細かに語られていく。神楽当日も、「御神楽の日になりて、多くの幄ども打ちて、寢殿の御前になく設けたり。日暮れて、才ども数を尽くして参り、御神の子四人候ふ」と才の男たちに注意が払われながら叙述が進んでいくのである。

逆に、春日詣巻では「四位十八人・五位三十人・六位五十人」と各位の人数が明示されていた四位から六位の貴族が、嵯峨の院巻では「四位・五位・六位、合はせて八十人ばかり仕うまつる」と大雑把な語られ方になっている。関心のありどころにより、詳細な叙述がなされる対象が異なっているのである。

また、この神楽においては、他の場面と異なり、衣装についての言及がないことも特徴である。才の男たちについては他の場面に例がないほど語られる一方で、他の儀式的場面で言及される類のものが語られず、『うつほ物語』の語りの位置は場面ごと揺らぐ、あるいは、少なくとも、記録的と言われる文体ではありつつ、その記録は完全には中立ではなく、他の叙述との繋がりがその場の特徴によって、語る対象の強弱が生じるのである。少なくともこの傾向は嵯峨の院巻までは見られるようである。

なお、この嵯峨の院巻での才の男への強いこだわりは、同一の神

楽の場面を語る菊の宴巻の表現と比べてみるとより鮮明になる。同一の神楽が二つの巻で重複して語られており、それぞれの語りの特徴が見えてくるのである。

かくて、霜月の神楽し給ふべきこと、伊勢の君に聞こえ給ふ、「府の源中将、ものし給はむとぞする。この度の神楽、少しよろしうせばや。召人など選びて、その行事、心留めてものせられよ」。伊勢の君、「例の者どもは、参りなむ。このそしにの雅楽頭などらは、内裏の召しにも、必ずなむ侍る」。「なほ、廻文して、奥に草仮名書きつけて遣はさば、すまはじ」。伊勢の君、「遊びの者どもは、えや見給はざらむ。末に、和歌を詠まむやは」などのたまふ。

かくて、その夜になりぬ。おとど、「さればこそ。』さばあらじ」と思ひつかし」とて、幄打ちて、才ばら、笛吹き、歌歌ひ、着き並みぬ。これに候ふ、ただ今の逸物どもなり。上達部・親王たち、殿の内より、世にある限り集ひ給へり。

（菊の宴 三〇五―三〇六）

菊の宴巻の場合、才の男たちは例の者としてそれほど注意が払われておらず、人名の列挙もなく、そのまま役割としての動きが語られていく。また、神楽歌の引用がそれぞれ見られるが、嵯峨の院巻では「召人、二十人ながら歌歌ふ」と大人数の召人が揃って声を出す荘厳な雰囲気を感じるが、菊の宴巻では「御神の子下りて舞ひ入り、山人返す物の音出だし、神歌仕まつる」（菊の宴 三〇六）

となっており、嵯峨の院巻に比べると簡素になっている。嵯峨の院巻の神楽の準備の場面における召人の名前の列挙表現は、場面の展開における作中人物の強い関心の中で生じたものであり、それは、続く神楽の準備や当日の場面の語りにも影響を及ぼすものであった。こうして見たとき、この神楽の日の最後に「才名告り」という特徴的な場面が挟み込まれることについて、召人が「才ども」と呼ばれることとの言葉の連想として理解されうる可能性も指摘しておきたい。

六 詳細な記録的叙述の傾向の変遷

ここまで、菊の宴巻までの場面を例に、儀式的場面における詳細な記録的記述が、物語の展開の中で前後の場面と繋がっていくという点について説明をした。しかし、このような傾向が菊の宴巻以降も見られるのか確認すると、この傾向はほとんど見られないようである。詳しく説明すれば、物語の展開に伴って、人々が大勢で移動するような場面が、国譲下巻の仲忠らの水尾訪問のあたりまでほぼ見られなくなる。また、儀式や行事も、たとえば産養など出産から起算すれば当然行われるようなものが多くなり、準備段階等への言及も少なくなるのである。

とはいえ、詳細な記録的叙述が少なくなるわけではなく、その対象が変わっていくのである。このことについて最後におさえておき

たい。

吹上上巻以降、場面の展開の中で、贈り物について必要に応じて記録的かつ詳細な叙述で語るが多くなる。特に高貴な身分の者同士で贈答をしあうことが多くなるにつれて贈り物の記述は多くなる。

先に引用した俊蔭巻を除けば、贈り物については、嵯峨の院巻までは、供として儀式に付き従った者たちへの禄が、

綾搔練の桂一襲、袴具したる女の装束一領被け給ふ。急ぎ参りぬ。異人々とどめ給ひて、遊び明かして、つとめて帰り給ふに、

同じやうなる女の装束被け給ふ。(春日詣 一五六)

のように簡素に言及されるのみであった。それに対して、吹上上巻で仲忠らが帰京する際に種松が用意した品々は、こと細かに語られる。

かくて、種松調せさするほど、贈り物に、一所に、白銀の旅籠一掛、山の心ばへ組み据ゑて、それに唐綾・薄物など入れて、白銀の馬に沈の結鞍置きて、白銀の男に引かせたり。沈の檜破子一掛、合はせ薰物・沈を、同じやうに、沈の男に引かせ、童子の薰衣香・麝香などを、破子の籠ごとには入れ、葉・香などを、飯などの様に入れて、沈の男に担はせたり。蘇枋の籠一掛、色々の唐の組を籠目にしたり。よき絹どもを三十疋づつ入れて縛り、蘇枋の馬に負ほせて、同じ男に引かせたり。海の形を、白う、白銀散らして鑄て、合はせ薰物を鳥の形にし、沈の

枝に作り花をつけて、島に植ゑ集めて、さやうの物を、鹿・鳥に作り据ゑ、…。(吹上上 二六三)

この直前の箇所、仲忠らへの土産の用意をしているかどうかを確認する涼の言葉があるが、それはこの引用箇所と一つの場面と捉えられるものであり、数々の土産は仲忠らの帰京の時が訪れたがゆえに必要とされた物である。ただし、その土産がいかに豪華で、かつ多かつたかということが言葉の量に比例するように語られることで、種松らの財力とともに、種松や涼と仲忠らとの繋がりや強さが表現されるのである。

この吹上上巻以降、贈り物に関する詳細な記録的叙述が多く現れていく。特に産養の品の記述が多く、誰からどのような物が贈られたのが細かに語られていく。物語の展開に伴い儀式のために人が大規模に移動することが少なくなる中で、物の贈答が人物の紐帯の強さを表していくのであり、重要なものだからこそ詳細に語られるのである。記録的な叙述はそうした叙述があえて用いられているところにこそ物語上の意味があると言えよう。

一方で、あて宮入内以降、それまでしばしば見られた、春日社参詣時のような行列に関する記録的叙述の類の表現は、蔵開下巻まで女御らの宮中からの出退にほぼ限られ、しかもそれほど長くはないものである。より正確に説明すれば、あて宮入内以降、あて宮入内の際の語られ方に比肩しうるような詳細な叙述が施される行列は、東宮決定後のあて宮参内の場面である。その少し前に仲忠らが水尾に

仲頼を訪ねる場面も詳細に語られるが、来訪者それぞれの供が語られることで結果的に長くなる点、それぞれの供の人数はそれほど多くない点から、別の問題として考える方がよいだろう。特に東宮決定後のあて宮参内は多くの物見車が出るほどで、東宮の母としてのあて宮の地位の高さが、行列の盛大さが語られれば語られるほど強調されていくのであった。

ただし、この東宮決定後のあて宮参内の記述以降、人の移動に伴う詳細な叙述はまたほぼ見られなくなる。その中で注目されるのは、いぬ宮が京極に移る際と、いぬ宮と俊蔭女の演奏を人々が聞きに来る際の記述である。ここでは、いぬ宮が京極に移る際の場面を検討する。

大将、渡り給ふべき人々の装束、宮にも尚侍の殿にも分かたせ給ふ。御渡りの料とて、人々にも奉りたり。尚侍の殿に、絹百疋・綾二十疋、織物・薄物、染め草などは、殊に奉り給ふ。尾張守に料を賜ひてせさせ給ふ。宮の、皆あり。綾、同じ数なり。同じ日、宮も渡り給ひて、三日過ぐして帰り給ふべし。大人、尚侍の殿に三十人、童、四人。宮の御方も、同じ数なり。女御殿のみぞ、これは数まさりたると言ふべきなり。

(中略)

八月十三日なり。大将、かねてよりも、「心殊にて渡し奉らむ」と思しければ、尚侍の御車、新しく調ぜさせ給へり。尚侍の殿のは、濃紫の糸毛に唐鳥鏈らせ縫はせ給へり。宮の御は、

二藍に、雲形つき、秋の野の形を、騒ぐ薄・虫・鳥の形を、色々縫はせ給へり。いとなまめかしう、さまざまにをかしう、鞆にも唐草の形を縫はせ給へり。下簾も香の地に薄物重ねて、小鳥・蝶などを縫ひたり。

右の大殿も、もろともにおはして、三日過ぐして帰り給ふべし。右大将殿も、御前厳しう整へ給へり。左の大殿の御方にも、人々のかたちよきを仰せられ、院よりも、四位・五位・六位、かたちよく、歳若き、内裏の藏人経たるも選びて、かの三条京極なる所に渡り給ふなるに仕うまつるべきよし仰せ給ひつれば、「我も、我も」と、「賀茂の祭は、さるべき限りこそあれ。これは、左の、右の大殿、院整へさせ給ふに、世の中に物のおほえある人々、この内に参らず、知らざらむは、いみじき恥なり」と申し、装束を整へ惑ひたり。(楼の上上 八六八―八七〇) 宮中に関係する移動を除くと、移動に伴う詳しく長い記録的叙述は物語の前半部に見られて以来である。それほどいぬ宮と俊蔭女の京極への移動は人々の注目を浴びているのである。その中で、二重傍線部のように賀茂の祭を引き合いに出した表現が見られる。この表現は、物語の前半で「賀茂に詣で給ひけるを、舞人・陪従、例の作法なれば、いと厳しうて」(俊蔭 二四)、「臨時祭の様なり」(春日詣 一三七)とあったことと照応する表現であり、この場面では賀茂の祭よりも大勢の人が参加していることが示されている。その点でも非常に重要な表現であるが、この場面が宮中の動きとは関連し

ない人の移動についての、久々の詳細な記録的叙述であることの意味をまず考えねばなるまい。

物語の前半部と重なるような記録的叙述が後半部において再度現れているのであるが、左大臣、右大臣、朱雀院が加わっているにせよ、中心人物は仲忠である。物語の前半部分で華やかな衣装を着た大勢の人々を伴って儀式や行事を開いていた人物達よりも若い世代の仲忠がこのような儀式の中心におり、世代が交代していることが示されるのである。しかもこの一年後に行われた琴の演奏の際には、嵯峨の院、朱雀院まで訪れており、前の世代にはなかったほどの規模のものであった。循環して繰り返されつつ、発展も見られるということである。楼の上上巻と楼の上下巻は、俊蔭の血脈の、学問と琴を受け継ぐ人々を中心に語られており、俊蔭巻の物語と強く照応している。そのような過去を受け継いでいく物語のありようと連動しながら、儀式的場面に伴う移動についても、かつてと同様に詳細な記録的叙述がなされるのである。

儀式や行事に伴う記録的な叙述は、物語の構成面といった、より広い視野で捉えられる面も有しており、従来考えられてきた以上に物語において重要な意味を有するであろう。

おわりに

『うつほ物語』の記録的な文体については、従来「記録的」とい

う言葉で説明されて片付けられてきたがゆえに見落とされてきたものがあつた。儀式的場面を詳細に検討すると、何を詳細に記録していくかという点では作中世界からの要請が見られ、単純に「記録的」という言葉で一括りにできない面がそれぞれの場面にあつた。また和歌の列挙を通じて、長大なものが記録されていく際の物語における仕組みを検討した。さらに、物語全体の詳細かつ記録的な叙述がなされるものの傾向から、物語内で移りゆく時間とその循環が捉えられ、物語の構成にも関係する問題であることを論じた。『うつほ物語』の記録的文体は、純粋な記録ではなく、あくまでも文学作品の中での表現の一つの形としての文体と言えよう。

なお、同時代の享受者には、記録的な文体における列挙表現などの差異を読み取り、そして楽しめる人々が含まれていただろう。それは、様々な儀式や歌会に参加できる貴族、また近くで見られる女房たちであつたと考えられよう。

注

(1) 「記録文体」という用語もあるが、本稿で論じるように、『うつほ物語』の記録は純粋な記録とは言えないため、「記録的」という語を用いることにする。

(2) 尊経閣蔵前田家十三行本は早稲田大学図書館所蔵の影印を利用して確認し、近衛家旧蔵本は京都大学貴重資料デジタルアーカイブを利用して確認した。ただし、東京大学図書館所蔵本（東京大学デジタルアーカイブポータルを利用して確認）、内閣文庫所蔵本（国立公文書館デジタルアーカイブを利用して確認）のように和歌の本文が下がる形で書かれているものも

存在する。

(3) 「貫之集」の屏風歌群にも月ごとの歌が残っており、歌とともに、月、詠む景物が記される。

引用文献

- 伊藤 禎子「二〇一一」「幻想の祝祭」『うつほ物語』と転倒させる快樂』森
話社↑初出は二〇一〇年
- 大井田晴彦「二〇〇二」「あて宮求婚譚の展開―その諸相―」『うつほ物語の世
界』風間書房
- 片桐 洋一「二〇〇二」「うつほ物語」の方法（二）『源氏物語以前』笠間書
院↑初出は一九六三年
- 神田 龍身「一九九九」「語りの偽再生装置―『源氏物語』の〈音読〉」『偽装
の言説―平安朝のエクリチュール』森話社↑初出は一九九四年
- 小西 甚一「一九七四」「宇津保物語の表現と享受者」『日本文学研究資料叢書
平安朝物語Ⅱ』有精堂
- 清水 好子「一九八〇」「物語の文体」『源氏物語の文体と方法』東京大学出版
会↑初出は一九四九年
- 杉野 恵子「二〇〇〇」「花びらや葉に歌を書く（書きつく）という表現につ
いて―『うつほ物語』を中心に―」『実践女子学園 実践教育』十九、実
践女子学園中学校・高等学校
- 田中 仁「一九九二」「書きつく」の意味―宇津保物語を主な資料として
―『言語表現の研究と教育』三省堂
- 中野 幸一「一九八一 a」「うつほ物語の作者像」『うつほ物語の研究』武蔵野
書院↑初出は一九五八年
- 中野 幸一「一九八一 b」「うつほ物語における長編構築の方法」『うつほ物語
の研究』武蔵野書院↑初出は一九七三年
- 中野 幸一「一九九九」『新編日本古典文学全集14 うつほ物語①』小学館
- 萩野 了子「二〇一三」「記録文体」『学習院大学平安文学研究会編』うつほ物

語大事典』勉誠出版

武藤那賀子「二〇一七」「物に書きつく―『うつほ物語』における言語認識―

『うつほ物語論 物語文学と「書くこと」』笠間書院↑初出は、二〇一一年、二〇一三年

※『うつほ物語』の本文の引用は、室城秀之校注『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう・二〇〇一年）による。なお、引用の後の（ ）内に巻名と同書のページ番号を付した。また、傍線等を適宜付した。